

解答はすべて解答用紙に記入すること。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合で、一部表記を改めた箇所があります。）

本書における「読む」対象は、基本的に書物である。あたりまえだと思われるかもしれないが、楽譜を読むことは「譜読み」と言うし、「絵画を読む」という言い方もある。他にも、「空（模様）」も読めば「顔色」も、相手の「a」の内」も読む。ここに共通するのは、表面に見えているものの裏にある意味を探る、一言で言えば「読み解く／＼b」する」ということだ。その対象は基本的に書き手の意図である。

ただ、文字を目で追っているときに、この意味で「読む」必要のないものもある。「情報収集する」ために読む場合である。①自分で空を見上げて明日の天気を読むのと、新聞の天気予報欄を読むこととは、ずいぶんと頭の使い方が違う。

かつては読むことこそが情報収集のための最善の方法だった。A 伝聞と異なり、書き留められたものは正確で、何度でも繰り返し見返すことができる。さらに印刷術と交通手段の発達により、同じ情報が多数の人に短時間でもたらされるようになった。マス・コミュニケーションの誕生である。

十七世紀に新聞を誕生させたドイツは、ニュースの取材・配信を専門とする通信社を発足させることにおいても先んじた。十九世紀半ばのことである。以降、情報のネットワークが少しずつ世界中に張りめぐらされていった。

その後、二十世紀に入るとラジオが、そして世紀の半ばからはテレビが急速な発展をB 上げた。ただし、こうした新来の電氣的メディアのもたらす情報は、一回かぎりで消えていくものであったため、最近までは旧来の新聞・雑誌と棲み分けられていた。聞き逃しや見逃しを補い、いつでも好きな時に何度でもアクセスできるのが活字メディアのメリットだった。

だが、録音・録画技術の発達とインターネットが誕生すると、そのメリットは薄まった。動画を見たり聞いたりするだけで必要な情報がいつでも手軽に手に入ったということだ。あるいは生成AIは、長文を読まずとも、要点だけを箇条書きにして教えてくれる。スピーディーな情報収集のためには欠かせないツールになりつつある。

もちろん、読むことによる情報収集がまったくなくなるわけではないだろう。文字情報は未だにわれわれの周りに溢れている。本は読まれなくとも、スマートフォンの画面を通じて活字をやりとりする機会はむしろ増えており、若者たちは活字離れどころか「活字まみれ」になっているのだ。

1、そのようなcハンランする情報に対して必要となるのは、むしろ読まない技術、つまりいかにして不要な情報をすばやく切り捨てるかという力だ。

情報収集としての読む力をDキタえるよりも、音声や映像を用いた方が手取り早く、知識を定着させやすいところもあり、その面での新たな技術が今後も開発されていくだろう。知識のEカクトクや蓄積を目的とするなら、読むことがその手段としてFジユイの座から追われる日はそう遠いことではないだろう。

こうして②情報収集のために読むことの意義は、二十一世紀に入って急激に薄れた。

G代替できない意義が読むことにまだあるとすれば、それは解釈が必要なテキストに対してだということになる。一読してすぐすべてを理解するのは難しく、あるいは理解したと思っても、そこからさらに奥に考えるべきものを隠し持っているテキストはたしかにあり、これからもなくなるならない。それは、今後もそのようなものが書かれ続けるからというばかりではなく、既に書かれたテキストの中に、何度読んでもそのたびに新たな意味を現出させるものがあるからだ。本書で言う「読む」とは、断りのないかぎりは「解釈する」とほぼ同義である。

この意味での読むというH 営みは、たんなる情報の更新にとどまらない新しさをもたらす。テキスト自体は何ら変化していないのに、読むたびに意味が新たに浮かび上がる。そのとき、解釈学で言う「地平の融合」が起きている。これは読む技法というよりは、テキストを正しく「読み解く／＼b」するときに自然に生じる事態ではあるが、あまり自覚されない。「意味の更新」がどのようになされるかをあらかじめ意識しておけば、読むことの価値をより高められるだろう。

テキストにc 的变化が生じていないにもかかわらず、新たな意味、より深い意味を見出したと感じるとき、新しくなっているのは自分自身ではないのか。そのことを、ガダマーは「地平の融合」ということばで表現した。

※ハンス・ゲオルク・ガダマーの解釈学は、聖書などの書物をどのように読むのかという技術論ではなく、読む＝解釈するとはそもそもどういうことなのか、2、テキストと読者の関係性について論じる哲学である。

③ 読者がテキストを読み、その内容を解釈するとき「地平の融合」が起きると、ガダマーは言う。ガダマーの哲学において最も有名と言える鍵概念であるが、少しイメージしづらいかもしれないので、まずはわれわれが読むという営みを普通どう捉えているかから考えよう。

読むことを通じて、テキストの内容が読者の頭の中に入り、蓄積していくというのが、一般的な読書のイメージかもしれないが、これは前節で見た、情報収集としての読むことである。

しかしガダマーによれば、テキストとは、たんなる個別の点の集積ではない。一つひとつの情報には背景がある。つまり、それが書かれたときには常識であった関連情報が背後に広がっている。明示はされないゆえに、先にそれを暗黙知と呼んだが、ガダマーはこれを「地平」と言う。地平は暗黙知の広がりだとイメージするとわかりやすいかもしれない。

読者は、テキストの意味を深く理解しようとするれば、直接そこには書かれていない背景をも受け入れなければならない。それは、テキストの「**1行間**」から窺い知れることもあるだろうし、また読者が積極的にテキストに蓄積された文化的背景を調べてはじめて明らかになることもあるだろう。**3** 作品の地平がわがものとなる。

**4** それだけなら、たとえば古典や海外の文献を読む際に、あれこれと想像したり調べたりしながら読む、ごくごくあたりまえの作業ではないのか。調べた部分も含めて、知識が増えたというだけではないのか。

**5**、ガダマーが言わんとしているのはまだ半ばにすぎない。「地平の融合」の英語は“fusion of horizons”であり、地平は複数形である。さまざまなテキストを読むことで、それらが融合するというのではない。テキストがその裏に文化的背景を宿しているのと同様に、それを読むわれわれの側にも既に形成されてきた常識があり、それがもう一つの地平である。普段自分では意識されないが、何を見、何を読むにしても、自身が現在立っている地平が一つの枠組みとなつて理解を左右する。

**J** 端的にそれを**④先入見**と言ってもよいが、決して悪いニュアンスを持つものではない。一切の先入見をなくしてしまえば、われわれは何一つ理解することはできない。理解に先立つ文化的枠組みには、言語そのものも含まれるからだ。

ただ、その先入見があまりに強く、あらたな知見を既成の枠組みにただ抛り込んだり、枠に合わせて切り取ったりするときには地平の融合は起こらない。そうではなく、今ある枠組みには捉えきれないものに出会い、それを受け容れることで自身の枠組みそのものが変容する事態こそが地平の融合と呼ばれるものである。

(伊藤氏貴『読む技法 詩から法律まで、論理的に正しく理解する』より)

※ハンス・ゲオルク・ガダマー：ドイツの哲学者。

問一 AとJについて、漢字は読み方をひらがなで答え、カタカナは漢字に直し、楷書で書きなさい。

問二 **a** に入る字を漢字一字で答えなさい。

問三 **b** に入る語として最も適切な語を文中から抜き出さない。(二か所の**b**には同じ語が入ります。)

問四 **1**と**5**に入る語として適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア こうして    イ ただ    ウ もちろん    エ つまり    オ しかし

問五 ①「自分で空を見上げて明日の天気を読むのと、新聞の天気予報欄を読むこととは、ずいぶんと頭の使い方が違う」とありますが、「天気を読む」ことと「天気予報欄を読むこと」にはどのような違いがありますか。説明しなさい。

問六 ②「情報収集のために読むことの意義は、二十一世紀に入って急激に薄れた」とありますが、その理由を説明しなさい。

問七 **c** に入る語として最も適切な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 文化    イ 物理    ウ 機能    エ 技術    オ 具体

問八 ③「読者がテキストを読み、その内容を解釈するときに『地平の融合』が起きる」とありますが、「地平の融合」について説明した左記の文の空欄にあてはまるように、本文の言葉を用いつつ、制限字数内で考えて答えなさい。なお、「地平」という言葉は用いないこと。

地平の融合とは、具体的には **I (十五字以内)** と **II (十五字以内)** が融合するということである。

問九 ④「先入見」とありますが、これとほぼ同じ意味で使われている言葉を本文中から漢字三字で抜き出して答えなさい。

② 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合で、一部表記を改めた箇所があります。)

五日間の学期末試験の日程をのりきった夜、美咲は、倒れた。高熱を出して病院に運びこまれたのだ。試験が終われば、終業式まで補習がある。うちの学校でさえ、普通科は一応進学を視野に入れて補習をするのだ。

「美咲ちゃんのお見舞い、行く？」

補習の一日目、スウちゃんから英語のノートを借りた時、尋ねられた。

「まさか」

と、答えた。

「行かないの？」

「行かないよ」

スウちゃんの目が、瞬く。□□という表情だった。

「行かないの？」ノートを返した時、また聞かれた。

「行かないよ」

「どうして？ あんなに仲がいいのに」

あたしは、肩をすくめて黙っていた。説明するのは面倒くさかった。

お見舞いなんて行ったら、美咲に笑われる。花とかお菓子なんて持っていったら爆笑ものかもしれない。入院なんて、美咲にしたら定例行事みたいなものだ。騒ぐほどのことじゃない。

小学六年生の時、風邪をこじらせて入院した美咲を見舞ったことがある。①本意ではなかった。師岡さんの入院が長引いているので、お見舞いに行きましよう、と、学級会で決まったのだ。みんなの書いた手紙とみんなで折った千羽鶴と花束を持って、先生と学級委員の友迫さんと一緒に、のこのこ病室に向いた。あたしの肩書は、友人代表。

「幼稚園の頃から、ずっと一緒なんだもの。理穂ちゃんと美咲ちゃんは、親友だよ」

②今のあたしなら、一蹴する。親友なんて、しらじらしくも美しい言葉を美咲にだけは、使いたくない。でも、当時、あたしは十二歳で、十二歳のあたしは、親友を見舞う優しい子の役を蹴っ飛ばすことができなかったのだ。

妙に白っぽい病室の真っ白なベッドに美咲は、横たわっていた。黄色い点滴の液が、チューブを伝い血管の中に落ちていく。十二歳の美咲は、茶パツのショートではなく、黒い長い髪をしていた。髪黒さと唇の紅さが、顔の青白さを引き立てて、ベッドの少女は周りの白さの中に今にも消えてしまいうようなほど、儂げだった。

腕には、注射の痕がいくつも、赤黒い不定形な文様を作っていた。

「師岡さん、早く、元気になってね……」

みんな待っているからお見舞いの言葉を続けられなくて、友迫さんが泣き出した。

「師岡さん、かわいそう」

③嫌な予感がした。ひどく落ち着かない気分だった。

こんなになって、痛いでしょと、友迫さんはしゃくり上げ、先生も少し涙ぐみながら、その頭をなで、美咲のお母さんは、「ありがとう。優しいのね。でも、もう少しの辛抱なの。二学期からは、学校に通えるから仲よくしてやってね」

と、エプロンで目頭をぬぐった。あたしは黙っていた。美咲は、目を閉じて動かない。指先だけが、シーツを握りこんでいた。涙やら、思いやりの言葉やら、お見舞いの品やら、お礼の挨拶やらが、清潔な白い病室の中を行き来し、それが一段落し、あたしたちは辞することになった。

「理穂ちゃん」

急ぎ足で病室を出ようとした時、美咲は目を開け、弱々しい声であたしの名前を呼んだ。ちゃんづけで呼んだ。嫌な予感は確信に変わり、あたしは、覚悟を決めた。

「もう少し……います」

そう、師岡さんを疲れさせないようにね。理穂ちゃん、あとでおばさんが、お家まで送って行くわ。師岡さん、さよなら。ほんとに、待ってるからがんばってね。じゃ、そこまでお見送ります。いえ、もう、よろしいですよ。先生、出席日数のことで……。頭の上や体の横を、言葉は漂い、消えていく。みんな出ていく。閉まる寸前のドアの向こうで、友迫さんが目を赤くして微笑み、手を振った。

④最悪な展開だ。あたしは悟り、もう一度覚悟を決め、美咲のベッドまで大股で近づいた。美咲が起き上がる。

「理穂」

美咲は、あたしに構えるヒマを与えなかった。⑤パシッと頬が鳴る。鋭い痛みが走る。よろめかないように、足を踏ん張るのが

精一杯だった。

「よくも、こんな恥ずかしいこと、してくれたね」

息を荒くして、美咲がにらむ。点滴のチューブが揺れた。

「理穂、あんた、最低！」

「わかってる」

「わかってない」

「わかってる！」

わかっている。これは屈辱だ。美咲にとって、安易な同情ほど屈辱的なものはない。千羽鶴の束が、ベッドの下に滑り落ちる。千羽鶴はいい。お見舞いの手紙も花束もいい。でも、友迫さんの涙だけは、まずかった。自分が、かわいそうな少女にされてしまったことに、美咲は蒼白そうはくになって怒いかっている。怒りながら、耐えていた。

「何よ、なんで、あたしが泣かれなくちゃいけないのよ。あんなふう……」

美咲の目から涙がこぼれた。噛かみしめた唇から、うめきが漏れた。

悔しい、悔しい、ちくしょう。

他人に対し、かわいそうと泣くことに、人はもう少し慎重でなければならぬだろう。助力できるなら、救えるのなら、最後まで支え続ける覚悟があるのなら、泣けばいい。友迫さんの涙は、無責任だった。勝手に泣いて、かわいそうがって、自分の気持ちだけ浄化して、微笑んでサヨナラなんて、あまりに無責任だ。⑥無責任な覚悟のない優しさは、ただの憐れみにすぎない。あたしが美咲から学んだことだった。

憐れまれて、たまるもんか。

シーツの上で、美咲の涙がシミになる。

「わかってる」

あたしは、呟いた。あたしも美咲を侮辱した。優しい親友の役を拒否できなくて、のこのこついてきた。最低だ。わかっている。スリッパの音がする。おばさんが帰ってきたのだ。あたしは、台の上の洗面器から、タオルをつかんだ。しっとり、濡れている。

「美咲、これ、きれい？」

「そうだけど、何を？」

美咲をベッドに押し倒す。顔にタオルをかぶせ、拭く。骨の手ごたえしかない肩を押しさえ、力をこめて拭く。拭けば、少しは涙の跡が隠せるだろう。美咲の泣き顔を誰にも見せたくなかった。たとえ、親にでもだ。

タオルを放り投げ、ドアを開けたおばさんの横をすり抜けて、あたしは、曇り空の下を家まで走った。一度も、立ち止まらなかった。

スウちゃんが、友迫さんのような真似をするとは思わない。かわいそうな台詞を露骨に口にするほど、あたしたちは、もう幼くないはずだ。でも、お見舞いになんか行かない。

「それより、明日、お祭りじゃん。スウちゃんどうすんの？」

「あたし……ケイクんと……」

「あつ、そうか。おバカな質問でした。いいなー、浴衣着て、カレシと夏祭りか」

「なんか、いかにも定番って感じだよね」

「贅言言わないの。くそーうらやましいぜ」

スウちゃんは、何か言いたそうに口を動かしたけれど、こくりと息をのみこんだだけで、黙った。夏に祭りに浴衣にカレシ、楽しさ満載の話題をふつたのに、浮かない顔つきだった。

ケイクんと何かあったのかもしれない。あたしも黙って、机の中にノートを突っこんだ。

言いたければ言うだろう。⑦言いたくないなら訊かない。口ごもつてのみこんだ言葉をどうするかは、スウちゃん次第だった。

あたしは耳を持っているから、聞くことぐらいはできる。小さなピアスを二つつけた耳たぶに、そっと触ってみた。耳たぶには自信がある。小ぶりで形がいいので、金のピアスがよく似合うのだ。

「なんかさ、嫌なこと多いんだよね」

スウちゃんが、眉を寄せて息を吐く。拳を作って肩を叩いたりする。頬のふくらんだ丸い顔は、そんな仕草をするとすごく老けて見える。二十歳を過ぎたおばさんみたいだ。

(あさのあつこ『ガールズ・ブルー』より)

問一  にあてはまる言葉として最も適切なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 冷淡だ    イ 不快だ    ウ 意外だ    エ 当然だ

問二 ―― ①「本意ではなかった」とありますが、この時の「あたし(理穂)」の状況として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の本当の望みとは、かけ離れた状況であること。
- イ 相手に対して申し訳ないという、すまない気持ちでいること。
- ウ 物事が自分の思い通りに進んで、満足していること。
- エ 最初から決めていた計画通りに、物事を進めること。

問三 ―― ②「今のあたしなら、一蹴する」とありますが、「今のあたし」が「親友」という言葉を使いたくないと考える理由を、左記の文の空欄にあてはまるように、制限字数内で答えなさい。

「親友」というしらすらしくも美しい言葉が、美咲を (十五字以内) とわかっているから。

問四 ―― ③「嫌な予感がした」とありますが、「あたし(理穂)」がこのように感じたのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 美咲がとても重い病気で、二度と学校に来られないのではないかと思ったから。
- イ 泣き出した友迫さんや同情する周囲の空気が、美咲のプライドを傷つけると直感したから。
- ウ 美咲のお母さんが自分たちに気を使っている様子を見て、申し訳なく思ったから。
- エ 自分だけが美咲に声をかけられず、友人代表としての責任を果たせないと感じたから。

問五 ―― ④「最悪な展開だ」とありますが、この時の「あたし」にとって、どのようなことが「最悪」だったのですか。具体的に答えなさい。

問六 ―― ⑤「バシッと頬が鳴る」とありますが、この時、美咲が「あたし」を叩いた理由を、本文中の言葉を用いて十五字以内で答えなさい。

問七 ―― ⑥「無責任な覚悟のない優しさは、ただの憐れみにすぎない」とありますが、筆者は「友迫さんの涙」と「あたしの行動(タオルで顔を拭く)」を対比させています。ここから読み取れる「あたし」が考える「本当の配慮」とはどのようなものですか。四十字以内で説明しなさい。

問八 ―― ⑦「言いたくないなら訊かない」とありますが、現在の「あたし」は過去の経験からどのような考えを持つようになったからですか。最も適切なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 親友ならば、言葉にしなくても相手の考えていることがすべてわかるはずだという考え。
- イ 相手の領域に土足で踏み込まず、相手が言葉にするまで待つことが対等な関係だという考え。
- ウ 他人の悩みに関わるのは面倒であり、自分の耳の形を愛でる方が重要だという考え。
- エ 美咲のように怒り出す人を増やさないために、なるべく他人とは深く関わらないという考え。

問九 小学六年生の病室での回想シーンにおいて、「白」「黄」「黒」「紅」「青白」「赤黒」など色彩を表す言葉が用いられています。このような描写を用いることで、どのような効果が生まれていますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 病室の清潔さと、美咲の健康状態が急速に回復していることを視覚的に伝える効果。
- イ 当時の理穂が、絵画や色の美しさに強い関心を持っていたことを示す効果。
- ウ お見舞いの花束や千羽鶴の華やかさを強調し、病室の暗い雰囲気や和らげる効果。
- エ 美咲の「儂げ」な印象と、それとは対照的な「生々しい痛み」を鮮明に描き出す効果。

問十 理穂が自分の耳たぶに自信を持ち、ピアスに触れる描写には、彼女のどのような人間性が表れていますか。スウちゃんへの態度を踏まえ、「相手」「価値観」という言葉を用いて、説明しなさい。